

特集 「播磨の道」 刊行にあたって

一昨年一二月、中国武漢で検出された新型コロナウイルスは、翌令和二年早々、日本国内に伝播し、瞬く間に感染症は全国に広がり、三月には緊急事態宣言が出されるに至りました。そればかりか感染は世界中へと広がり、中世のペストや第一次世界大戦期のスペイン風邪を想起させました。

令和三年に入ってもその猛威は衰えを知らず、再び、緊急事態宣言が出されています。その最中、一月一七日に開かれた「ひょうご安全の日」・一七のつどい」では、つぎの宣言が読み上げられました（改行など表記は原文通りではない）。

阪神淡路大震災から二六年が経ち、私たちは国内だけでなく、世界の多くの人たちにも、この震災の教訓を知ってもらいたい、活かしてもらいたい、そのように願って伝え続けてきた。

この震災に加え、平成の時代に北海道南西沖地震をはじめとして新潟県中越地震、東日本大震災、そして熊本地震など、地震だけでも一〇を超える災害を経験し、多くの教訓を得ることができた。

それらの教訓を活かした対策を一層進め、南海トラフ地震、都市直下型地震等の国難災害の減災を目指そうとしたその矢先に、新型コロナウイルスによる感染症拡大が発生した。

この感染症との闘いを通じて、「新しい生活様式」という言葉が生まれ、「三密」を避けるために在宅勤務やテレワーク、リモート講義・ズーム会議などが考案され、日常の生活に浸透しつつあります。集団で会食することや、グループで移動することが忌避され、人と人との間のソーシャルディスタンスという空間が、強く認識されるようになりました。不要不急の外出を控えよう、と普段なら問題にならない「人の移動」が、これほど特別な関心と呼ぶのはコロナ禍特有の事情だと言えるでしょう。そこで、「道」が浮上します。

特集「播磨の道」という企画は、コロナ禍のために通常の研究会の開催、グループでの調査活動が十分に果たせないという物理的制約から立案されたものですが、新型コロナウイルス感染症の拡大という昨今の社会状況から捉え返された問いでもあります。

主題としての「道」は、第一に道路です。人や家畜が日夜、通行することで踏み固められた道の検証が、第一の課題です。考古学研究による古道の発掘、公共施設としての駅家・寺院跡の発見など、兵庫県内の発掘成果には顕著なものがあります。それによって弥生時代から古代にかけての道の姿が明らかになっていきます。

第二の主題は、モノを運ぶこと、つまり「運搬」と道との関係です。炭やたたら製鉄のような山間部での生業が生み出すモノと、塩などの海浜部で生み出されるモノと道の関係、さらには舟運と陸路の道の接続など、運搬という経済行為に関わる問題群が「道」という主題には存在します。

そして第三に、道を行く「人」という問題があります。「土佐日記」や「奥の細道」などは、それを証明していますが、戦時には軍隊の移動があります。そうした道行く人々の記録には、「道」とその周辺施設に関するさまざまな情報が蓄えられています。その情報は、時代を超えて蓄積されて行きます。

本特集に当たっては、研究室のメンバーに加え、禰宜田佳男大阪府立弥生文化博物館長、大國正美神戸新聞社取締役企画総務局長・神戸深江生活文化史料館長から特別にご寄稿頂きました。玉稿をお寄せいただいた皆様には厚く御礼申し上げます。

なお地域を播磨に限定したのは、本研究室が風土記、赤松氏と山城、たたら製鉄などの研究班を通じてこの間、播磨に注意・関心を集中してきたからです。その結果、班ごとの調査研究活動の成果を載せるといふ縦割りが一掃されているのは、特集ならではの誌面構成です。広く読まれることを願います。

令和三年（二〇二一）一月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長

藪田 貫